

研究報告掲載報文要旨

京都府沿岸における近年のサワラ漁獲動向

戸嶋 孝, 熊木 豊, 井上太郎

京都府沿岸では1999年からサワラの漁獲量が増加し、2007年には2,230トンの高い漁獲水準に達した。京都府沿岸におけるサワラの漁期は2000年から2004年には9月および10月の秋季であったが、2006年以後には冬季における漁獲が増加した。秋季から冬季にかけて漁獲されるサワラの尾又長組成を調べた結果、1歳魚の大きさが小型化する現象がみられ、これはサワラの分布・移動の変化と関連していると考えられた。

阿蘇海におけるハマグリ類の生息状況について

久田哲二, 今西裕一, 藤原正夢

ハマグリ類の希少な生息地である阿蘇海で、その生息状況を調べた。漁場である野田川河口域周辺で8種の二枚貝類が出現した。河川内の調査点を除き1m²あたりの重量において、ハマグリが8種のうち最大であった。その殻長範囲は、複数の年級群、親貝および稚貝が同所的に存在することを示し、これはハマグリが阿蘇海内で再生産していることを示唆した。分子遺伝学的な解析を行ったところ、阿蘇海産ハマグリは、シナハマグリやタイワンハマグリとは異なるハプロタイプグループに属する一方、他地域産ハマグリと同じグループを構成し、また、熊本県産ハマグリと共通する遺伝的特徴を示した。これらのことから、過去におけるハマグリ類の放流の影響は明らかにならなかった。

阿蘇海の高藻相およびミヤベモク群落について

西垣友和, 山本圭吾, 遠藤光, 竹野功壘

閉鎖性内湾である阿蘇海において、高藻相を把握するために2009年5～6月に出現高藻相を調べた。また、2008年7月および2009年6月に唯一の高藻相であるミヤベモク群落の分布状況を調べた。出現した高藻相は12属18種(緑藻7種, 褐藻1種, 紅藻10種)であり、京都府内の舞鶴湾や宮津湾に比べて出現種数はかなり少なかった。高藻相の出現種数は湾口部を含む東側で多く、湾口部から離れた西側で少なかった。ミヤベモク群落は主にカキ殻あるいはカキ礁の上に形成されており、大規模な群落が宮津市男山地先および文殊地先で確認され、阿蘇海内の群落面積は約2.4haと推定された。

阿蘇海における垂下飼育によるアサリの成長、生残、肥満度

谷本尚史, 中西雅幸, 久田哲二, 尾崎 仁, 藤原正夢

阿蘇海において2008年10月から2010年6月にアサリの垂下飼育試験を行い、成長、生残および肥満度から、アサリの養殖の可能性を検討した。垂下飼育によりアサリの肥満度は阿蘇海で漁獲されている個体のそれを上回ることが明らかになり、特に1～6月には他県のアサリの最大値と同等以上になると推定された。1～6月の期間に商品価値の高い殻長42 mm以上の個体を生産するためには、産卵疲弊と推定される斃死が終息する12月から殻長30 mm以上のアサリを水深3 mに垂下することにより、高い生残率で育成できる可能性が示唆された。

京都府宮津地先におけるクロアワビの成長(短報)

久門道彦, 山本圭吾, 道家章生

若狭湾西部海域に位置する宮津市養老地先および栗田地先でのクロアワビの成長を調査した。養老地先における天然、放流貝と栗田地先の天然貝の間には成長差が認められず、両地先を合わせた宮津地先での von Bertalanffy の成長式は、 $L_t(\text{mm}) = 204.3(1 - \exp(-0.185(t - 0.474)))$ 、殻長(L, mm)と体重(W, g)の関係は、 $W(\text{g}) = 7.691 \times 10^{-5} \times L^{3.104}$ と推定された。同地先で漁獲可能サイズとなる殻長100 mmに達する年齢は、4.1歳であることが明らかになった。

緑藻フサイワズタの陸上養殖における成長と直立茎の収量(短報)

山本圭吾, 西垣友和, 遠藤光, 安間洋樹, 竹野功壘

陸上養殖におけるフサイワズタの成長と、可食部である直立茎の収量に対する通気の効果を確認するために、2009年9月と10月にそれぞれ養殖試験を実施した。9月の試験では446 gの藻体は25日間に1,550～1,850 gまで成長した。10月の試験は通気区と対照区で実施し、85 gの藻体は34日間に前者では373.3 ± 25.3 g、後者では397.7 ± 28.9 gまで成長した。本試験でのフサイワズタの成長速度は、商業的に陸上養殖されているクビレズタとほぼ同等であり、本種の陸上養殖の可能性が示唆された。また、通気による直立茎の成長促進効果が認められ、通気により収量の増加が可能であると考えられた。